

# 朝の集まりがなくなるまで

津守 真

ゆっくりと過ごす中から生まれる子どもの行為

大人が子どもとゆっくりと過ごすとき、子どもが自分からはじめる行為には、その子にとってたいせつなものが含まれていることを、私は繰り返し述べてきた。

八年前に、私が保育の実践の場で毎日を過ごすようになった第一日目に、入園したばかりのH夫とゆっくり過ごしたときのことを、私は「生命的応答がなされるまでの細やかな配慮」と題して記した。(拙著、『子どもの世界をどうみるか』NHKブックスP123―126)

H夫は砂場に電車や自動車を持ちこんで遊んだ。H夫にとってそれがどういう意味をもつのか、「第一日目にはその後のことはまだかくされたままである」と私は結んだ。H夫はその後三年間を幼稚園に通い、父親の転勤と共に米国の養護学校に移った。その間の多くのことを考え合わせると、この第一日にゆっくりと過ごしたことがその後の生活にとっ

でも基盤になっていると言ってよいように思う。

第二日目に学校にきたとき、H夫はすぐに砂場にきて、自動車を自分の手で動かした。たいしたことをするのでなく、ほんの少し動かすだけだが、だれにも邪魔されずに自分でやれるのがうれいみだった。私も母もただ傍で見ているだけだったが、静かな落ち着いた空気が私共の間にあり、H夫は自分のペースで長い時間砂場にいた。小雨が降る寒い日で、室内に誘ったが応ぜず、次第にH夫は私の膝にのってきた。何かのチャンスにH夫が「ヤンマ」というので、私もやんまと言うとケラケラ笑う。何度も繰り返し笑って笑い合った。ゆっくり過ぎずというのは、子どものあるがままを承認し、そのときを一緒にたのしむことである。そういう関係そのものに意味があるが、その中から生み出される行為には、その子の本質があらわれているので、省察に価する。

H夫が自動車に向かい合うとき、H夫の心はそれに魅きつけられ、愛着を感じている。それは単なる物体ではない。H夫の心の奥がそこに結びつけられている。そう考えると、自動車はH夫の分身である。自分自身の一部とも言える物をいじりまわし、操作することによって、人は自分が何であるかを次第に知るのではないだろうか。父親が運転し運んでくれる自動車、弟たちにはじきに取り上げられる自動車を、自分のやり方で自分が思うようにいじるときに、子どもの心にはいろいろの思いが湧いているのではないだろうか。H夫にとって、自動車のもつ意味は、私がつき合った三年の間にも変化してゆく。自動車を通して、H夫は自己の探究を試みている。

子どもとゆっくりと過ごせないとき

保育の実践の場には、子どもとゆっくりと過ごせない状況もたくさんある。そのことも私はこの八年間に経験してきた。そういう状況をどう生きるかということも保育者の課題である。

次々に新しい子どもが登園する四月には、どの子どもも保育者とのゆっくりとした関係を求めているのに、大人はそれにこたえられない。子どもも親も期待がはずれたり不満が残り、保育者はその対応に悩む。新しい子どもだけではない。以前からいる子どもも、担任が変わり、クラスの部屋もかわる。その環境の変化に戸惑う子どもも少なくない。ゆっくりと過ごした体験を積んできた子どもでも、状況の変化に遭遇して、心を乱される。その変化がマイナスにはたらかないようにするために、更にきめこまかな保育を必要とする。状況の変化は一生涯ついてまわるのであって、幼少期にその時期を、保育する大人と一緒に過ごし、乗りこえることによって、子どもの自我は強くされてゆく。

ゆっくりと過ごす時間をつくるのが困難な状況にも、その時間の大切なことを認識し、少しずつその時をつくってゆくと、何週間かの間には、大人も子どもも落ち着いてくる。時間のかかることである。毎年、四月は大人も子どもも大変である。このことは学校だけでなく、就職、転職、退職などが四月に多いことを考えると、四月は家族全体が不安定になる時期である。

## 幼児期と児童期

私の学校では、何年か以前まで、小学部のクラスでは、朝十時ころに集まって体操をしていた。幼児期の数年間をゆっくりと過ごしてきた子どもたちだから、小学校の時期になればこういう日課もあっていいのだろうと、最初私も思った。

ところが朝の体操の場面に参加したとき、私にはいろいろの疑問が湧いた。何よりも子どもとゆっくりと過ごす関係にならない。子どもたちは集められ、名前を呼ばれ、体操をする。養護学校だからクラスは十人位だが、できない子には大人が後ろについて手を振らせたり、皆でピアノに合わせて手をつないで歩かせる。そういうときには、大人と子どもとはゆっくりつき合うというよりも、手本に合わせてやらせる関係になる。子どもによっては、ねそべったり、部屋の外にとび出す。そういう子の手を引いて立ち上がらせ、ひきもどすのはひと苦勞である。ゆっくりと一緒にごすときには、大人と子どもとは対等の立場に立ってやりとりをするのだが、体操のときには大人と子どもとの間は断ち切られて、支配服従の関係になりがちである。そして、体操が終わり、さあ好きなことをしていらっしやいと言われても、子どもは本当には自分の活動をしない。四十分か一時間したら昼食になることが分かっているから、思い切った活動ができない。そういうところに私が入っていても、子どもはゆっくりと遊ばないように思えた。

ひとりの子どもは、体操の最中に、廊下から職員室に通じる扉の鍵をあけて職員室にゆ

きたがった。私はその子を体操の場にとどめるのは意味がないと思い、その子と一緒に校長室にいった。その子はソファの上で何度も跳びはね、私の顔を見て笑った。その子はよく高い所に上がり、遠くの方を眺める目つきをするのだが、校長室のソファにいるときには、次の時の何かを追うのではなく、そのときをゆっくりとたのしんだ。

私の学校の朝の集まりと体操は、いつのまにかやらなくなった。そうなると子どもが活動に取り組む意気込みが違うのがはっきり分かる。ある子どもは、朝、自分がやりはじめたことを、昼までやりつづける。大人の観点からの活動内容の価値は別として、最後までやり遂げようとする子どもの活力と探究心はだれにも劣らない。

ある子どもは、大人が個別にさそい、粘土や手仕事をするが、大人との関係の中で子ども自身かそれを展開してゆけることを分かっているから、子どもの顔は輝いている。最近では高学年のクラスが一緒に地域の文化会館まで手仕事をしにゆくが、みんなそこで何かをやろうと思っているから、皆で一緒に行動しても朝の体操とはちがう。いきたくない子どもは学校に残り、自分の活動をつづける。

私は朝の集まりや体操をやらなければいいとは思わない。子ども自身の活動を生み出す、大人とのゆっくりとした関係が作られることが大切と思うのである。幼稚園や学校の中で大人たちがぎめた日課やカリキュラムが、子どもとゆっくりとつき合うのを妨げることがある。子どもが求めていることが何であるかが見えなくなるほどに、大人が自分できめたことにとらわれたら、教育が本末転倒する。

私は、子どもが大人との関係の中で自分から活動する自由を保証することが、幼児期にきわめて大切であることを長年の間見てきた。しかし、小学校でもその考えが通用するかどうか、八年前には自信がなかった。いま、小学校の時期も同様だといえることができる。養護学校だからではない。普通の学校でも同様だろうと思う。もちろん、子どもが違えば求めているものは違うから、普通学校だったら形態や内容は違ってくるだろう。けれども、子どもが自分から活動することを承認し、それにこたえてゆく大人との関係をつくることは、その後の時期でも同様だと思う。

(愛育養護学校)

